

托卵のさらなる謎に挑む：熱帯性カッコウ類の生態から浮かびあがった新たな理論展開

企画：田中 啓太（立教大・理）

近年、相次いで発表されたカッコウ目鳥類の分子系統樹が示しているのは、托卵研究ではモデル生物となっているカッコウ *Cuculus canorus* など、カッコウ亜科(托卵鳥のみで構成)の中ではごくごく最近跳び出してきた一部の跳ねっ返りに過ぎないということである。托卵性カッコウ類は熱帯起源であるばかりでなく、そのほとんどが今でも熱帯・亜熱帯で繁殖を続けている。すると、もはや熱帯での生態を無視して托卵は語れないといっても過言ではない。本自由集会では、近年明らかになりつつある熱帯性のカッコウ科托卵鳥であるテリカッコウ属の生態に焦点をあてることで判明してきた、カッコウ-宿主の“軍拡競争”の共進化におけるさまざまな理論的展開を紹介する。

中でもとくに着目するのは宿主のクラッチサイズ（一腹卵数）である。クラッチサイズは鳥類において非常に重要な生活史形質であるが、全地球レベルでみると緯度に沿って変化していることが近年の比較研究によって明らかになった（Jetz et al. 2008）。つまり、熱帯などの赤道付近では小さく、極に向かって徐々に大きくなる、緯度ラインが存在しているということである。このクラッチサイズが元来重要な生活史形質であるならば、当然、宿主が托卵鳥に対して防衛戦略を進化させるうえでも大きな影響を及ぼしてきたはずである。換言すれば、クラッチサイズこそ温帯と熱帯での鳥類の生態の違いを解明するために必要な“鍵”の一つであり、クラッチサイズを手がかりに托卵鳥の進化を説明することで、これまでに知られていない新たな側面を発見することができるかも知れないのだ。

1（三上）と2（佐藤）ではこのクラッチサイズの影響を重点的に吟味し、議論する。一方、3（田中）ではテリカッコウ類の雛が示す、宿主の雛への擬態について、進化・遺伝学的基盤にもとづいた最新の見解を紹介する。

なお、これらの研究は日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤 A：23255004（上田）、若手 B：24770028（田中）、および特別研究員奨励費：24-4578（佐藤）による研究助成のもと行われたものである。

0. 主旨説明：田中

1. 卵を抜く？抜かない？-さらに抜け目のなかったカッコウ：三上 修（岩手医科大学）
2. 捨てるならどっち？カッコウ卵かカッコウ雛か：佐藤 望（立教大院・理，学振 DC2）
3. 雛擬態と頻度依存選択-よりコアな進化理論の導入へ：田中 啓太（立教大・理）
4. まとめ-温帯ドグマからの脱却-：上田 恵介（立教大・理）